

熊野本宮大社の能楽

一 はじめに

和歌山県東牟婁郡本宮町本宮の熊野本宮大社は、能「巻絹」の舞台ともなっており、謡曲にもなじみのある御社である。同社は御神宝として、二七面の能面を所蔵されている。同社所蔵の能面は明治二二年に本宮大社を襲った洪水のため、彩色がおちてしまっているものが多い。しかしながら、面裏に寛永三（一六二六）年に寄進されたことこの書かれている、江戸時代初期に遡る能面もある。また、井関・古元休など江戸時代前期の作者の作品がある。彩色の落ちているだけに、下書きがわかる部分もあり、能面の制作技法を考える上でも興味深い資料である。後述するが、同社は江戸時代の遅くとも寛永年間あたりから、明治二年の社殿流失の頃まで、多少の中絶はあったであろうが、演能が行われていたと考えられるのである。

明治一四年に描かれた同社の古絵図には江戸時代末の能舞台が描かれている。明治二二年の洪水により、熊野本宮大社は現在の場合に移転し、それ以降能舞台が作られることはなかった。能もそこでとだえたと考えてよいだろう。近世から明治初期の演能番組は同社に遺され

飯塚 恵理人

ておらず、能がどのような集団によって行われたのか、流儀すら不明である。能面・古絵図等現在熊野本宮大社に残されている資料から、江戸期の熊野の能についてうかがわれることについて述べてゆきたい。

二 熊野本宮大社の祭礼能と能舞台

熊野本宮大社では四月一五日に祭礼能を行っていた。このことを示す資料は、『本宮 神主 祢宜 御師 社法 祭禮 別當社僧宦位 堂社員数門前山林 社法格式古今相違 御建立年代年中行事』（熊野坐神社蔵書 五 一冊）（図1・2・3）で、その四月の項に

十五日 御田祭 御膳 奉幣 祝詞

国主御代参奉幣祝詞 御師案内勤之

本宦中座西座長床出仕祈天下

太平五穀豊穰御祓

御宮山 神輿遷幸此作山 音楽神楽

御田植 小乙女 衆会社家供奉

獅子八撥 猿楽

高倉下社水戸社神歌獅子八擧
総座拜編木

〔付箋〕猿楽之事 明和年中御炎上後舞台無之本式ニハ難相動
り形義のミ相動申候

という記載がある。四月一五日は熊野本宮大社の大祭の日であるが、そこに「猿楽」が演じられていたのである。

熊野本宮大社での演能がいつ頃から行われていたのかかわれる資料は現在の所明らかでない。寛永年間の識語を持つ能面が所蔵されていることを考えれば、遅くとも寛永年間頃には、能が行われていたと考えるのが自然であろう。

明和年間の舞台炎上のみならず、江戸期を通じて能舞台は常に上演できるような状態にはなかったらしい。紀州から出て八代将軍となっ

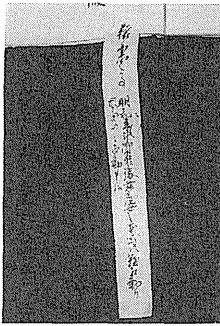


図 3

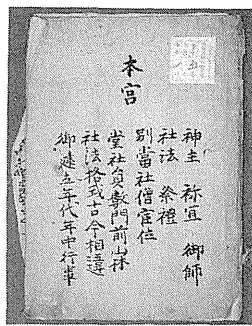


図 1

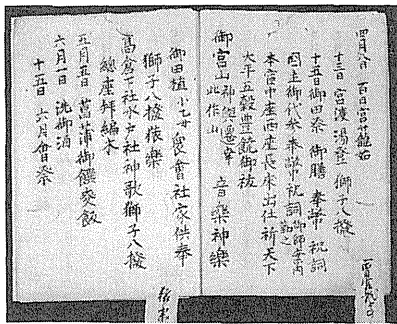


図 2

た徳川吉宗の時代、享保一五年（一七三〇）から一六六年にかけて本宮全体に修理が加えられた。その時の棟札が残されている。ここに「舞台」とあるのが能舞台のことであろうと思われる。

（棟札）

紀伊国牟婁郡熊野 奉行 家臣 水野大炊頭忠昭
本宮諸殿末社及鳥居神楽屋舞台 三浦遠江守為隆

楼門等漸破壊自 副奉行 海野五郎三郎廣窓

将軍家被修補之且課勸化於諸国 小野権大夫辰倫

享保十五年至十六年畢功 笠原忠佐衛門信生

紀伊国主権中納言従三位源朝臣宗直監議 古屋竹右衛門美貴

小奉行 中村與一衛門久武

このように享保以前に舞台があったことはわかるのだが、それがどのような舞台であったかは資料がない。

明和七（一七七〇）年十二月には本宮が大火災にあった。『官幣大社 熊野坐神社年表』⁽¹⁾（以下『年表』と略称）に「十二月十八日、本宮類焼、社殿悉ク焼失」とある。この時は能舞台も火災にあって焼失した。（図3）の付箋によって明和七年の舞台炎上以降本格的な能が出来ず、「形義のミ相動」という状態であった時期のあることが知られる。この炎上の後、本宮が本格的に再建されるには実に四十年以上の時間を要した。『年表』には火災の翌年の明和八（一七七二）年の項に「是年、御假宮造立、次イデ造宮ヲ公儀ニ出願、若山ヨリ伝達ヲ乞フ、意ヲ達セズ」と再建の動きはあったものの、藩との交渉が不調であったという記述がある。ようやく安永四（一七七五）年に及んで「四月、造宮伝達ヲ得テ参府、寺社奉行ニ願出」が出来た。本宮大社

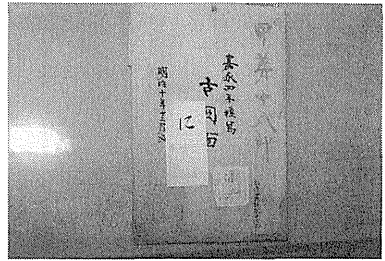


図 4

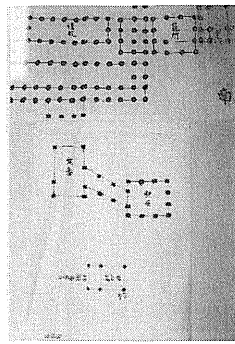


図 6

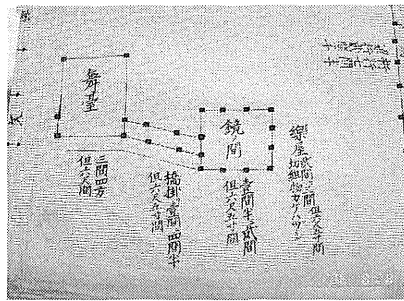


図 7

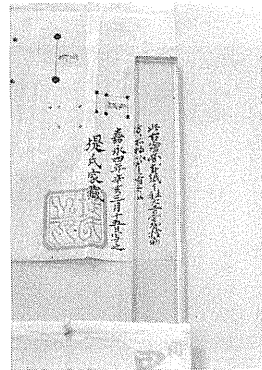


図 5

には「安永四年乙未三月 月番役所」と書かれた袋に入っている地図が残されている。これには、境内の内焼失した部分が判るように書かれている。四月の上京の準備の為作成された地図の下書きもしくは控えと思われるが、この地図には「舞台跡」と記されている。少なくともこの時期まで舞台が再建されていないことがわかる。本宮の再建が

本格化したのは、『年表』によれば享和元（一八〇一）年前後であり、それが一段落ついたのはその一〇年後の文化八（一八一二）年前後であった。『年表』の文化八年の項に「三月十一日、上棟、十六日子亥ノ刻正遷宮（但禮殿東西両門未成、炎上後四十一年ニ当ル）」とある。能舞台も文化八年あたりまでには再建されたと考えてよからう。

その後幕末になると、本宮は度重なる洪水に悩まされることとなった。特に嘉永年間以降は深刻だった。『年表』の嘉永元（一八四八）年の項に「八月、大洪水、悪水社殿大床ヲ侵ス、瑞垣門・築地堀・不開門等流失」、嘉永五（一八五二）年の項に「七月、大洪水、建物損害甚ダシク、社地築上ノ議起ル」とある。同社には嘉永四年・五年に洪水後の修理のために作成されたと思われる建物の外観図や寸法図の写しが残されている（図 4・5・6）。この図の封筒には『嘉永四年模写 古図面 附境内堤防脇略画 明治十年十二月改』（貼紙・に張紙・図五 朱・図甲第十八印 朱印・熊野坐神社社務所）（図 4）とあり、絵図（図 5・6）には、

此古絵図本紙は社大工墨屋権之助

方ニ所持いたし有之候

嘉永四年辛亥三月十五日写之

堤氏家蔵（印）

とある。宮大工墨屋権之助方に所持されていた絵図を、嘉永四（一八五一）年に書写したというものである。同社には嘉永五年の絵図（図 7）も所蔵されており、この絵図には、舞台・橋掛り・楽屋とその寸法が書かれている。これらの舞台の図は明和の炎上後に再建された舞台の図及び絵と考えて良いだろう。

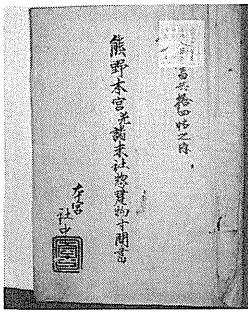


図 8

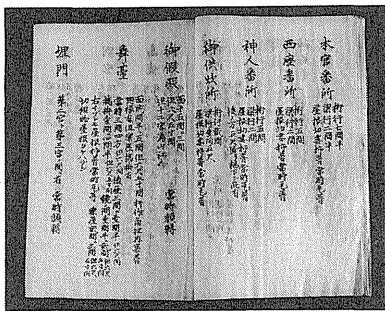


図 9

この舞台の寸法図は、『熊野本宮并諸末社惣建物寸間書 本宮 社中』(熊野坐神社蔵書 八三 一冊)(図8・9)に

面式間半ニ五間但六尺五寸間桁作角柱内裏葺

廻縁有但楽屋橋掛有

舞台 当時三間四方但六尺間後座三間ニ老間半但六尺間

橋掛老間ニ四間半但六尺五寸間 鏡ノ間老間半ニ式間 但六尺五寸間

右イヅレモ屋根柿葺當時瓦葺 楽屋式間ニ三間 但六尺五寸間

切組物屋根カケハツシ

とある。この資料は明治二(一八六九)年秋に書かれたものである。舞台は三間四方で四間の橋掛りもあった。鏡間の他に楽屋がある。これも明和年間の炎上後に再建された舞台のものと考えてよいかと思う。これらの資料による熊野本宮大社の舞台は、能舞台の形式にのっとった本格的な舞台であったと言える。ただこの舞台には地謡座がなかつ

(四)

たと考えられる。地謡は難子方の後ろで謡ったのであろうが、これは能舞台に地謡座の出来る以前の古い形が残されていたものと考えられる。あるいは炎上後再建する際も、舞台の寸法など基本的な構造はそれ以前の形を踏襲したのかも知れない。

嘉永年間の洪水にも、この能舞台は残ったものと思われる。しかしながら、その後しばらくして舞台の橋掛り・楽屋が洪水で流失してしまった。それらが流失した年代には二説ある。一説は慶応二(一八六六)年で、同社蔵の『明治十四年九月調製 内務省出シ写 紀伊国東牟婁郡本宮 熊野坐神社及撰末社明細図書 熊野坐神社』(番一四二 一一 図乙第十三号)の能舞台の図の注記に、「能舞台 但橋掛リヨリ鏡ノ間楽屋ハ去ル慶応二年九月洪水ニ因テ流失以来再造ナラズ」とあるものである。もう一説は明治三(一八七〇)年で『明治壬申五年十一月 本社撰社末社神名并境内坪数諸建物寸間取調書』(熊野坐神社蔵書 八四 一冊)(図10・11)に、

舞台 當時三間四方 但六尺五寸間 後座三間ニ一間半
橋掛一間ニ四間半 鏡ノ間一間半ニ間
楽屋二間ニ三間 屋根瓦葺

右橋掛鏡間ハ去庚午秋九月洪水之節流失致シ未タ宮繕不相成候事とある。この「庚午」が明治三年にあたる。この二説のどちらが正しい説であるかは判らない。

以上見てきたものの他に、熊野本宮の建物の外観図(図12・13・14)が二枚ある。これにも能舞台は記されている。この二枚は同じ封筒(図12)に入れられているが、その封筒(貼紙:図三四 朱:同乙第十二号)の表書きは、

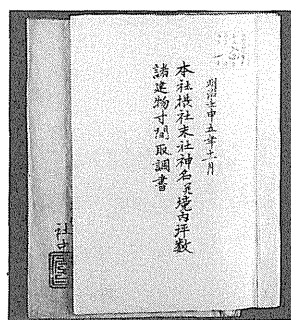


図10

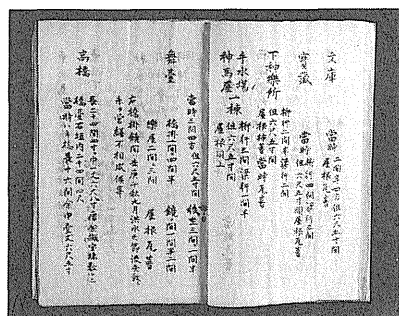


図11

明治十四年九月調

惣建図 一葉

明治二十一年十月廿七日

境内木材取調へ図 一葉

御県庁出し 此方ハ取消シ成ル

となっている。この封筒によれば、この二枚は境内の総ての建物と木材の図について記したもので、一枚が明治一四年九月調査の全ての建物の図で、一枚が明治二十一年九月に記された境内の木材の図となる。しかしながら、封筒とこの外観図の年記は一致していないようで、外観図には二枚とも明治一四年に写されたことを示す記述がある。そのうち一枚の外観図では、能舞台の橋掛り・鏡間が描かれていない。能舞台の橋掛り・楽屋が流失して以来、明治一四年まで橋掛り・楽屋を欠いていたと考えられる。もう一方の絵図には橋掛り・楽屋が描かれ

ている。橋掛り・楽屋を持つ絵図は、洪水以前の外観図と考えるのが自然であろう。

明治二二年の洪水は『年表』に、「八月十八日より降雨、十九日午後一時出水、午後五時ニ至リティヨイヨ甚シク、水量七丈餘ニ達シ、中四社・下四社・撰末社・神楽所・能舞台・文庫・宝蔵・社務所・神馬舎等流失、浸水社殿軒ニ達ス」とある。この大被害により熊野本宮大社は現在の場所に移転することとなった。

三 熊野本宮大社所蔵能面について

熊野本宮大社所蔵の能面に最初に着目されたのは、私の知る範囲では、宝生流シテ方で、能楽協会名古屋支部支部長を勤められた故内藤泰二師（平成三年没）である。内藤師は能面研究を志され、全国の能面を訪ねて丹念に写真を撮って回られた。この内藤師の遺された資料の中に、熊野本宮大社所蔵の能面の写真があった。内藤師はこれらの能面を一般に紹介することが出来るように全数、しかも正面（やや右）からの写真と面裏の写真と両方を撮影されていたが、一般には紹介されないままであった。内藤師の撮影された写真はネガ・プリントともに退色がおこっており、そのまま印刷に堪えるものではない。

その後、平成八年三月に町田市立博物館の田辺三郎助氏・小泉充康氏が同社を調査に訪問された。熊野本宮大社の能面の所蔵番号はこの両氏の調査に基づいている。

平成八年八月に、熊野本宮大社のご好意で、私もこれらの能面を調査させていただいた。この調査から分かったことについて、以下記述

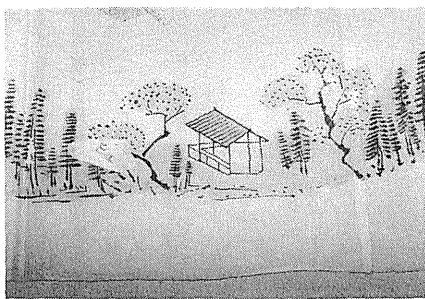


図13



図14

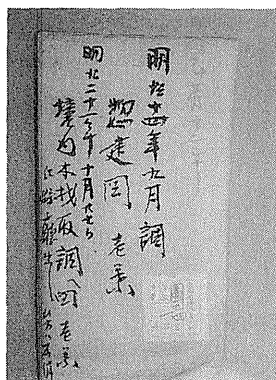


図12

して行きたい。

能面の種類の判別は、専門家の間であっても意見の分かれる場合が多い。特に、同社の能面は彩色の落剥しているものが多く、判別が困難なものもある。そのようなこともあるので、能面の名称は、保田紹雲氏のご教示をもとに私の考えで新たに付けさせていただいた。彩色は後補のものもあるので、彫刻を主として判断することとした。特に

所蔵番号3、5、10、13、22の五面は名称判別が難しい。適否について、御教示頂ければ幸いである。これらのうち、面裏に識語のあるものを中心に、気がついたことを述べて行きたい。

所蔵番号2 孫次郎

面裏の識語によって、尾崎治高が元禄一一（一六九八）年五月に寄進したことがわかる。尾崎治高は、享保九（一七二四）年甲辰霜月の年記をもつ同社蔵「熊野本宮奉納連歌 百人一句」（貴 十二号）の序文に「熊野の神かきにつかへ奉る尾崎治高の家にそのかみより此山の主は花の梢と云御句を傳えて神詠と称し年ごとに此御社の連歌を執行ふこと世々の例しに成ぬ」とあることから、当時の本宮の社家の中心的人物であったと考えられる。この能面は社家の寄進ということになる。あくまで憶測に過ぎないが、社家の者が舞台にたって演じたことがあったのかも知れない。

所蔵番号3 若女

面の眼の部分をあとか加工して大きくした跡がある。能面として使用する時にこのような形で眼を大きくすることは考えがたい。同社学芸員八木尚広氏によれば、明治二年の洪水以降、なにかの芸能でこの面を使用しようとした時に、眼が見えづらいということで、ナイフで削ったという言伝えがあるそうである。伝承ではあるが充分考えられることであろう。

所蔵番号4 狸々

面裏に「薄狸々」と朱字で書かれている。なお、面の名称に関する朱字の同筆と思われる識語を持つ能面は、他に6、9、11、12、15、16、17、18、21、22、23、25、27がある。4を含め、全一四面となる。ある時点で能面の整理が行われ、その時につけられたものであるか、あるいは整理して朱字で名称を書いたものを一括して寄進したもので

あろう。(26番の「小面」は朱字の識語であるが、筆が異なる)

所蔵番号5 小面

面裏の識語によって、楠加兵衛(一清?)が寛永三(一六二六)寅年九月二八日に寄進したことがわかる。楠加兵衛については調査が及んでいない。ただ、明治三(一八七〇)年正月の年記を持つ同社蔵『熊野本宮御鎮座由緒書并大祭日神職交名取調帳 本宮 社中』(祭第一号)の「本官社家之次第」の冒頭に四人の名前が見られ、そのうちの第一番目に「右座大宮司 楠五百枝熊野連正範」の名が、第四番目に「左座二神主大宮司代 楠又太郎熊野連正文」の名が記載されている。楠姓の名が二名見られるのである。後の二人は丸山姓と尾崎姓で、「以上四人称老分」(山令指揮)とある。楠加兵衛はあるいはこの社家の楠氏の一族ではないかと推測される。所蔵番号2の寄進者である黒田治高も社家であったが、複数の社家が能面を奉納していたとすると、能もこれらの社家を中心になって演じられていた可能性がある。同社御所蔵の能面の中で、最も古い年記を持つものである。面裏に「十三ノ内」とあるが、同時に寄進された能面が一三面あったのかも知れない。

所蔵番号6 中将

面裏に「中将」と朱字で書かれている。「出目」⁽²⁾の烙印がある。この烙印の形から、古元休(越前出目四代源助 古元休満永 寛文二二(一六七二)年没)⁽³⁾作であると考えられる。ただしこの烙印は、田辺三郎助氏によれば古元休の弟子の元利栄満も使用した可能性があるとのことである。であるとすれば、これも栄満の作である可能性もある。

所蔵番号7 山姥

この「山姥」は、三枚の板を張り合わせたものを彫って作成している。このうち上部にあたる鼻先の一枚は欠落している。また残っている中部と下部が分れてしまっている。にかわで接着してあったものが水損によってはがれたものである。鼻先欠落や鼻先の楠木はこの他に所蔵番号11、15などにも見られる。面裏に墨書で「放春(?) 大」⁽⁴⁾とあるが、これについては調査が及んでいない。

所蔵番号8 平太

この「平太」には「又サク」という刻印がある。面裏を削って文字が書かれている。薄くて判読し難い。「□□太夫寄進也」の不明部分が分かれば、同社の能に関係した集団の手がかりになるのだが残念である。

所蔵番号10 孫次郎

彫刻は孫次郎のようで、髪の毛は万媚のそれである。彫刻から孫次郎とした。

所蔵番号11 姥

面裏に「イセキ」の刻字と、鼻の上部に◇の刻印がある。この◇は、多賀大社所蔵の三日月・橋姫、上野市紺屋町有の伊賀上野天神祭の鬼行列「役の行者」の面にもある。中村保雄氏は、多賀大社の三日月について、

額の中央とその左に「イセキ 休心」、それに鼻の上部に「◇」の刻銘を刻んでいる。このことから本面が、井関家二代の次郎左衛門の作品であることがわかる。江戸時代初期作。

とされ、さらに同社の橋姫について、『額』⁽⁵⁾の中央に「イセキ」と鼻の上部に「◇」の刻印がある。(中略)「三日月」と同一の作者といって

よい。江戸時代初期の作。』と言われる。中村氏は◇の刻印をもつ多賀大社の面を二つとも井関二代次郎左衛門の作とされている。また、内藤泰二氏は、上野市紺屋町有の「役の行者」の面の◇の刻印について「イセキ◇刻印のある作(親信と河内の中間二代のいずれかの作といわれている)」と述べておられる。親信と河内の中間二代は前述の次郎左衛門と三代備中掾となる。さらに、田辺三郎助氏は、

「イセキ◇」の刻銘は、後世「片仮名井関」といわれた元になる、いわゆる、「しらせ鮑」で、(中略)「イセキ◇」のほうは前記

(飯塚注：岐阜県関市)春日神社の若い女面、滋賀県多賀大社の三日月と橋姫、三重県伊賀上野天神祭にかかわる尉、福井県気比神宮の尉、石川県那谷寺の父尉、山梨県金桜神社の若い男女二面など、枚挙にいとまがないほどである。それらの遺品の、井関各代との関係はどうなるのであろうか。おおむね若干細面で肉付きが薄く、ややさびしげに見えるものが多いが、彫りや彩色については小差がある。おそらく四代河内を除く、そのころまでの近江井関の作品群といってよいであろう。

と言われている。田辺氏はこの刻印について、初代も含めて三代のいずれかの作とされている。この熊野本宮大社の面が初代から三代のどれの作品であるかはわからない。しかしながら、四代目家重は正保二(一六四五)年没であることから、この面はそれ以前の江戸時代初期の作品と考えて良いだろう。

所蔵番号12 深井

面裏に「深曲」と朱字で書かれている。「深曲」の例は『能面大鑑』⁽⁹⁾にある。齊藤香村氏はこの面を金春流特有の面とされる。野上豊

一郎氏は、『深曲』といふのも同じく下間少進の注文で古源助が作ったものとされてゐる。名称は「深井」と「曲見」を一緒にしたやうな女面といふ意味である。』と言われる。

所蔵番号13 (尉)

寛永一七(一六四〇)年卯月に良隆という人物が、本宮尾崎坊に寄進したものである。所蔵番号5の寛永三年について古い年記である。この良隆については調査が及んでいない。この尉面は小尉のようにも見えが耳がない。名称の特定は困難である。(尉)とした。

所蔵番号22 今若

面裏に「童子」と朱字で書かれている。この面は、彩色が落ちていくことによって下書きが見える。下書きでは上部に冠型と殿上眉がある。また、眉根がよっている。形・下書きから見ると最初は「今若」を作成しようとしたのかと思われる。一方、彩色の毛書きを見ると、女面の髪型が残されている。また、口の部分にも埋木がしてあり、口をせまくするように加工をした後がある。面裏には「童子」と記されているが、「童子」に女面の髪型があるのはおかしい。これは、この面に男の眉の毛書きがあるので、額の銀杏ははげて見えないが、「今若」を「喝食」に塗り直したのではないかと推測される。このようなことから、この面は最初にある種類の面として作成され、それがその後加工されて別の種類の面として転用されたものであると考えられる。「喝食」も「童子」も少年の面である点で共通することから、「喝食」の面を「童子」と記したのではなからうか。これも、彩色が落ちたために、面が転用されて行く過程がわかる資料である。

所蔵番号24 泥眼

面裏に烙印が押されているが、判読できない。烙印にかかるような形で朱字が書いてあるものの、これも判読できない。

所蔵番号26 小面

面裏に朱字で「本宮 奉寄進 金春 小面 吉野 周可」とある。

金春本面の小面を写したという意味であろう。この吉野の「周可」という人物については調査が及んでいない。ただこの能面を吉野の人が奉納しているということは、この近世の熊野の能楽を行った人々が吉野にも関係する人々であった可能性がある。なお、この「金春 小面」とあるのは、京都金剛家の「雪の小面」に「金春本面 正」⁽¹⁾とあることから、もと金春家の所蔵であった現在の「雪の小面」の写しという意味であったと考えられる。これと同様に「雪の小面」を写した面を金春本面写としたものは観世宗家にも所蔵されている。中村保雄氏⁽²⁾はその観世宗家の小面の解説に、

面裏に金泥で「龍右衛門作写之（花押） 金春氏所傳之小面今観世氏乞而写之 因為記其傳來耳 宝曆庚辰二月吉日 松峯萬輝（花押） 秦氏綱（花押） 観世左近殿」とあり、別に朱漆で「龍右衛門作写之庸久（花押）」とある。若い女面の創作者として有名な龍右衛門作の金春大夫家（氏綱は十三世）伝来の小面を、十五世観世左近元章の依頼によって大野出目家七代庸久に制作させたという極め書とみてよい。

と書かれている。この「雪の小面」は非常に有名であったので、近世において、金春の小面として写しが相当作成されている。但し、本作は「雪の小面」とは余り似ていない。

四 まとめ

明治二二年の洪水は、同社の社殿に非常な被害をもたらした。同社の能面の彩色の落剥や鼻先の欠落は、水泥によってにかわの接着が低下して引きおこされたものである。同社に所蔵されていた能関係のものが能面のみであったとは考えがたく、おそらくは能装束もあったであろうし、能面も今残されているものはかつての一部にすぎなかったであろう。明治二二年当時の社家で現在も社家として残っている家がないということ、これ以上近世の熊野本宮大社の能についてわかる資料は現在のところ管見にない。

しかしながら、全国の能楽史を考える上でみれば、このような交通の便という意味では恵まれていたとは考えがたい場所で、江戸時代を通じて能が維持されていたということは、近世における能のあり方を考える上でも、興味深い事例であると思われる。今後番組等の資料がみつかることを切望している。現在同社での演能は行われていない。謡曲ゆかりの地であるだけに、なにとなく残念ではある。

注

- (1) 『官幣大社 熊野坐神社年表』 高島圭一（八木尚広氏談・正しくは圭一） 官幣大社熊野坐神社社務所 昭和一七年二月発行 この『年表』は年代順に記されているので、引用の度に頁数を記すことはしないこととした。

- (2) 『能面』 著者 中西通 写真 今駒清則 玉川大学出版部 一九八五年四月発行 24 十六 五七頁

- (3) 「根来寺所蔵・紀州徳川家寄進の能面」 田辺三郎助 『国立能楽堂'96特別展示 根来寺所蔵 紀州徳川家寄進の能面』所収 国立能楽堂調査養成課編集 日本芸術文化振興会 平成8年10月発行 四〇頁 『16の面(飯塚注・平太)』には「出目」の烙印がある。これを越前出目系統の古元休満永とするか、彼の弟子であり聲であった元利栄満とするか(『面目利書』 決めたがたい)
 - (4) 『多賀大社の能面・狂言面』 中村保雄著 多賀大社社務所発行 駈々堂出版株式会社 平成三年一〇月発行 49 三日月 一一八頁
 - (5) 同注4 54橋姫 一一〇―一二二頁
 - (6) 「既刊能面図鑑文献紹介 能面 同名異相異名同相弁(五三) 文献紹介の巻(三)」 内藤泰二 「宝生」 昭和四七年八月号 一二頁 『観る―愛面居士の能面探求辨―』所収 内藤泰二著 内藤順一発行 保田紹雲編集 わんや書店製作 平成五年二月発行 二〇六頁
 - (7) 『能面』 田辺三郎助著 ブック・オブ・ブックス 日本の美術41 小学館 昭和五六年一二月発行 一八四―一八五頁
 - (8) 『東京国立博物館図録・仮面篇』 昭和四五年三月発行 所蔵番号六八一四三頁
 - (9) 『能面大観 序巻』 齊藤芳之介著 大正九年一月発行 能楽書院 二〇頁 (復刻版) 昭和五三年四月発行 東洋書院
 - (10) 『能面論考』 野上豊一郎著 昭和一九年七月発行 小山書店 三二六頁
 - (11) 『面と肖像』 原色日本の美術 第二三巻 小学館 昭和四六年六月発行 一四〇―一四二頁(一〇一 小面)
 - (12) 『観世文庫設立記念展 観世宗家 幽玄の花』 解説「能と能面」 中村保雄 26小面 一六六頁 平成四年 朝日新聞社
- (付記) 貴重な資料の調査を御許可いただきました、熊野本宮大社宮司九

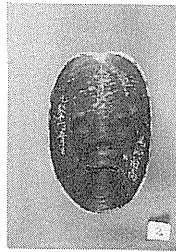
鬼宗隆氏に心より感謝致します。本稿作成の際に色々御教示頂きました熊野本宮大社学芸員八木尚広氏ならびに、調査に同行頂いてさまたまの御教示を頂きました寛敏一師、保田紹雲氏に心より感謝致します。なお、平成七・八年度文部省科学研究費基盤研究(C)「近代東海地域能楽史の研究―能楽資料の調査・収集とデータベース化」(飯塚恵理人 深谷哲 三木邦弘 課題番号・〇七六一〇四三八)及び平成八年度学園研究費助成(C)を頂きました。本稿はその成果の一部となります。

能 面 資 料

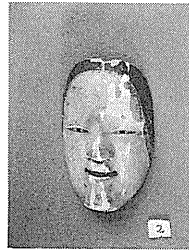
熊野本宮大社の所蔵番号順に写真を掲げた。面裏に烙印等のあるものは面裏の写真も載せた。所蔵番号と名称を付した。(○内は写真番号)



④ 3 若女



③ 2 面裏



② 2 孫次郎



① 1 曲見



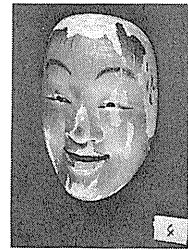
⑧ 5 面裏



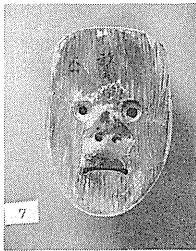
⑦ 5 小面



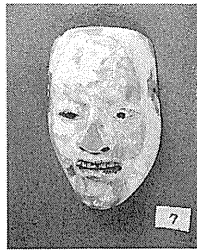
⑥ 4 面裏



⑤ 4 猩々



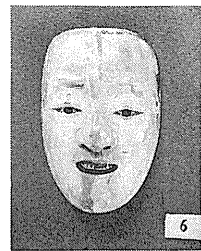
⑫ 7 面裏



⑪ 7 山姥



⑩ 6 面裏



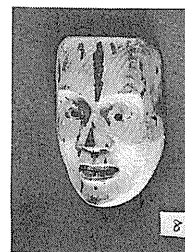
⑨ 6 中将



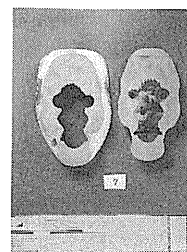
⑯ 8 刻印・識語



⑮ 8 面裏



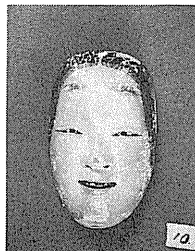
⑭ 8 平太



⑬ 7 中部と下部



⑳ 11 姥



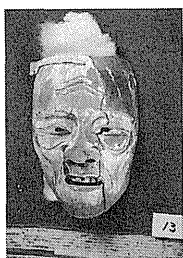
⑲ 10 孫次郎



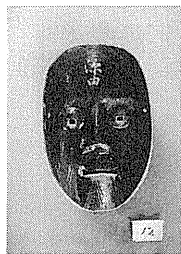
⑱ 9 面裏



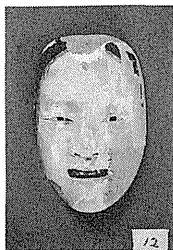
⑰ 9 邯鄲男



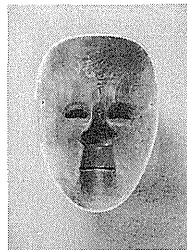
②④ 13 (尉)



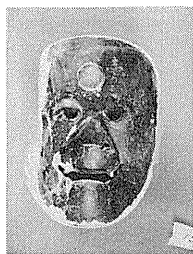
②③ 12 面裏



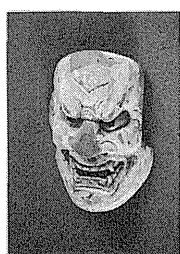
②② 12 深井



②① 11 面裏



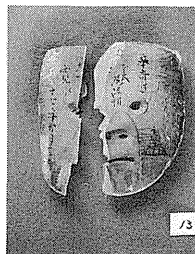
②⑧ 15 面裏



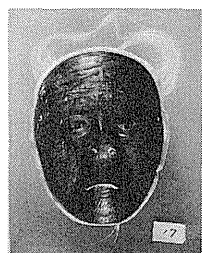
②⑦ 15 しかみ



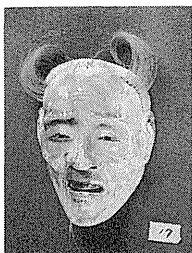
②⑥ 14 三日月



②⑤ 13 面裏



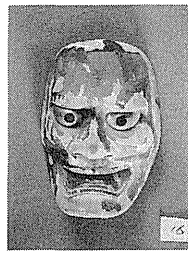
③② 17 面裏



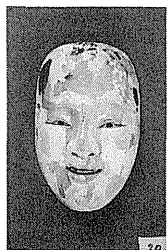
③① 17 小尉



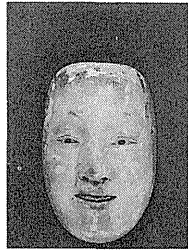
③⑩ 16 面裏



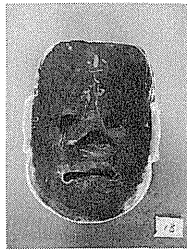
②⑨ 16 黒髭



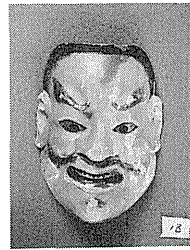
③⑥ 20 小面



③⑤ 19 童子



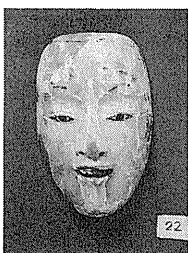
③④ 18 面裏



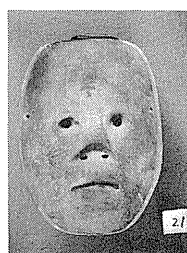
③③ 18 小天神



④⑩ 22 面裏



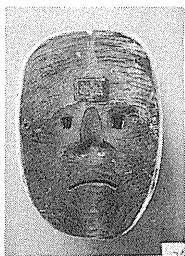
③⑨ 22 今若



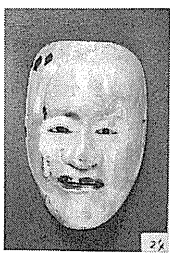
③⑧ 21 面裏



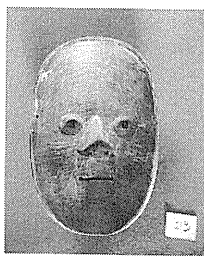
③⑦ 21 平太



④④ 24 面裏



④③24 泥眼



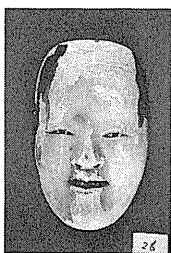
④② 23 面裏



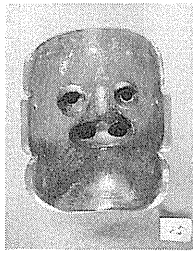
④① 23 小面



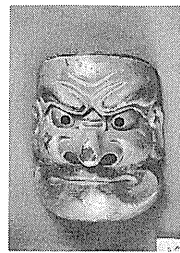
④⑧ 26 面裏



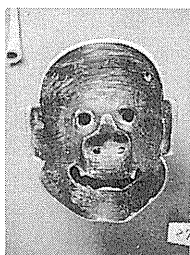
④⑦ 26 小面



④⑥ 25 面裏



④⑤ 25 大癡見



⑤⑩ 27 面裏



④⑨ 27 般若

熊野本宮大社所蔵能面

所蔵番号	一般名称	所蔵名称	材質	木取	裏刀目	裏地	書き入れ・烙印等	法量(総)	法量(備)	法量(奥)	備 考
1	曲見		檜	四方框	平滑		なし	21.1	14.3	6.9	
2	孫次郎		檜	四方框	主に横跑目 やや荒い	黒漆真塗	刻銘：尾崎治高 奉寄進 元禄十一〇丑月日	21.6	13.5	6.8	鼻のうら彫が6と同型
3	若女		檜	四方框	荒い放射状	ベソガラ	なし	20.7	13.0	7.0	目穴拡大(菜人細工)
4	堀々	薄羅々	檜	四方框	主に横跑目	茶拭漆	朱書：薄羅々	20.9	13.7	7.5	観世本面羅々写
5	小面		檜	四方框	乱跑目	生地	墨書：寛永三寅 寄進 大一 種田兵衛(?) 十三ノ内 元月廿八日	20.5	13.6	7.2	毛書・まゆ書は後補 目穴は半丸型
6	中符	中符	檜	正框目	縦跑目	茶拭漆	烙印：出目 朱書：中符	20.7	13.8	7.5	
7	山姥		檜	下筋：正板目 上筋：下板 鼻先：欠落	荒い縦跑目	茶拭漆	墨書：政春 大一	21.1	13.9	7.2	
8	平太		檜	四方框	乱跑目	黒漆	刻字：又サワ 墨書：□良 □□太夫 寄進也	19.3	13.5	7.3	墨書部分は黒漆を削って記している。
9	邯鄲男	邯鄲男	檜	四方框	縦跑目	黒漆塗	朱書：邯鄲男	19.8	14.0	8.2	
10	孫次郎		檜	正框目	横跑目	赤拭漆	なし	21.3	13.1	7.2	彫刻：孫次郎型 彩色：万願型
11	姥	姥	檜	板目	横乱跑目	生地	刻銘：イセキ◇ 朱書：姥	20.3	13.9	7.1	ひたいしわ二本
12	深井	深曲	檜	四方框	ひたい：横跑目 下部：縦跑目	黒漆	朱書：深曲	20.5	13.4	6.8	深曲は深井の一種
13	(尉)		檜	正框目	ひたい：横跑目 それ以外：乱跑目	生地	良隆(花押) 奉寄進 本宮 尾崎防 寛永十七年卯月吉日	18.9	13.0	6.3	小駒のようにも思われるが耳がない
14	三日月		檜	正框目	平滑な跑目	黒拭漆	なし	20.5	14.4	8.0	
15	しかみ	しかみ	檜	框目	平滑	ご粉下地黒漆	丸型烙印：□目□□ 朱書：しかみ	21.0	13.6	8.1	法量(備)はあご巾
16	黒髭	黒髭	檜	四方框	ほぼ横跑目	茶拭漆	朱書：黒髭	20.3	14.4	9.2	
17	小尉	小尉	檜	框目	やや荒い	茶拭漆	朱書：小尉	20.9	15.7	8.7	
18	小天神	小天神	檜	四方框	乱跑目	黒色	朱書：小天神	21.8	15.8	8.4	
19	童子		檜	正框目	主に横跑目	朱色塗 水肌起付着	なし	20.8	13.4	6.5	
20	小面		檜	四方框	ひたい：横跑目 鼻より下：放射型 跑目	茶漆	なし	20.8	13.2	7.0	
21	平太	平太	檜	正框目	主に横跑目	生地	朱書：平太	20.2	14.4	7.2	
22	今若	童子	檜	四方框	ひたい・あご：横 跑目 ほぼ細跑目	焦茶拭漆	朱書：童子	20.6	13.2	7.2	口本横走で長く横走。鼻の下筋には短横。鼻上筋は横走のみであり 根をよせている。(今若) 玉手箱は顔の隅目・頬の下面面(後縁) 顔の形 色は緑黒。咽喉に藍色し、童子と呼んだか
23	小面	小面	檜	正框目	ほぼ横跑目	茶拭漆	朱書：こもて	21.4	13.5	6.7	「雪の小面」写(形から)
24	泥眼		檜	正框目	荒く乱れた横跑目 鼻の彫刻：逆丁字型	茶拭漆	烙印：□貴 朱書：貴□	20.4	13.6	7.4	烙印・朱書とも判読不可
25	大観見	長盛観見	檜	正框目	ほぼから上：横跑目 眼：横跑目	赤漆塗	朱書：長盛観見	20.8	16.5	10.6	水損を免れている
26	小面	小面	桐	正框目	ほぼ横乱跑目	黒漆	朱書：本宮奉寄進金部小面吉野周可	21.3	13.3	7.0	現金剛家蔵「雪の小面」写
27	般若	般若	檜	四方框	主に横跑目	黒拭漆	朱書：般若(刻銘・花押判読不可)	21.4	16.7	9.6	花押は誰のものか不明